

質問

60代の男性です。大腸がんが再発し、複数の薬を組み合わせた治療をしてきました。先日、医師から病状が進行していると言われ、次の治療としてベクティビックスという薬の投与を提案されました。新タイプの薬のようですが副作用が不安です。どのような副作用があるか教えてください。



答え

ベクティビックス®は分子標的治療薬という新しいタイプの薬です。分子標的治療薬は、がん細胞に多く存在する特定の物質に作用することで抗がん作用を示します。そのため正常細胞が影響を受けることが比較的少なく、従来の抗がん剤によくみ



中村 敏己

徳島大学病院
がん専門薬剤師

抗EGFR抗体薬による皮膚障害

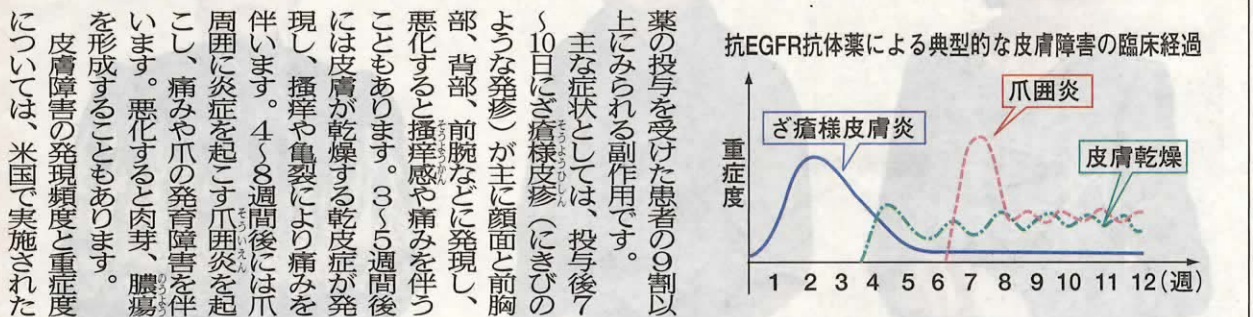
早めのセルフケアが大切

られる骨髓抑制(白血球減少など)や脱毛、悪心(吐き気)・嘔吐などの副作用は少ない傾向にあります。

ベクティビックス®は、がん細胞の増殖や転移を引き起こす上皮成長因子受容体(EGFR)に作用し、その働きを抑えるので、抗EGFR抗体薬と呼ばれています。現在、大腸がん治療で使用されている抗EGFR抗体薬には、セキシマブ(アービタックス®)とパニツムマブ(ベクティビックス®)があります。

一方、EGFRは正常な皮膚細胞などにも存在し、増殖・分化をコントロールしています。そのため、抗EGFR抗体薬は皮膚細胞にも作用して増殖・分化を抑制し、皮膚の炎症状態を持続的に起こします。皮膚の表皮が弱くなり、壊れやすく保湿力が低下した状態となります。

皮膚障害は、抗EGFR抗体薬の投与を受けた患者の9割以上に見られる副作用です。主な症状としては、投与後7〜10日にさ瘡様皮膚疹(にきびのような発疹)が主に顔面と前胸部、背部、前腕などに発現し、悪化するや掻痒感や痛みを伴うこともあります。3〜5週間後には皮膚が乾燥する乾皮症が発現し、掻痒や亀裂により痛みを伴います。4〜8週間後には爪周囲に炎症を起こす爪囲炎を起す。痛みや爪の発育障害を伴います。悪化すると肉芽、膿瘍を形成することもあります。



抗EGFR抗体薬による典型的な皮膚障害の臨床経過

臨床試験の結果があります。皮膚症状が出る前に予防的に治療を開始した患者(予防療法群)と、症状が出てから治療を開始した患者(対症療法群)で比較したところ、予防療法群の方が発現頻度も重症化も低く抑えられることが報告されました。このため皮膚障害に対する予防的治療が重要とされています。多くの施設では皮膚障害の予防的治療として、抗EGFR抗体薬の治療開始日から、ミノサイクリン(ミノマイシン®)カプセルの内服と保湿剤(ヒルドイド®など)の塗布を開始します。同時にステロイド外用剤もあらかじめ処方しておき、皮膚障害発現時にはすぐに塗布を開始できるようにしています。ミノサイクリンは抗炎症作用を目的として使用されます。

抗EGFR抗体薬による皮膚障害に対しては、早めにきちんと予防・対処し、症状の悪化を防ぐことが大切です。自己判断で休薬したり、ステロイド外用剤の副作用を怖がってきちんと塗布しなかつたりすると、重症化する危険性があります。悪化してひび割れや潰瘍を発現してしまうと強い痛みを伴い、歩行などの日常生活に支障を来してしまいます。重症化によって減量や中止せざるを得なくなることもあります。

国際的な臨床試験により、抗EGFR抗体薬による皮膚障害は治療効果が高い人ほど強く発現することが分かっています。治療中は皮膚を清潔に保つ。保湿する▽日焼けなどの外的刺激を避ける▽スキンケアを心掛け、ステロイド外用剤などで皮膚障害をコントロールしながら治療を継続し、抗腫瘍効果が得られるようにすることが重要です。

質問募集 がんに関する悩みに「徳島がん対策センター」がお答えします。質問内容を詳しく書き、住所、氏名、年齢、性別、電話番号を明記し、〒770-8572 徳島新聞社文化部「がん相談」係へ。紙上に住所、氏名、電話番号は掲載しません。同センター(電0888(6336))9438でも平日午前8時半〜午後5時に受け付けています。